

Present——「今、ここ」にあるということ

副学長・学生支援機構長 グローバル・コミュニケーション学部教授

玉井 史絵

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。

そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。

(ヨハネの黙示録 21 章1－5 節)

この追悼礼拝のきっかけとなった JR 福知山線脱線事故から今日で二十年となります。私は今でもその日のことを鮮明に覚えています。その日は晴れてはいましたが、四月にしては冷たい風が吹いていました。私は二講時目に新町キャンパスで授業があつて教室へ行くと、入ってきた学生の一人が「JR で大きな事故があつて電車が遅れている」と伝えてくれました。当時はまだガラケーの時代で、今のようにすぐに正確な情報が入ってきませんでした。当初は自動車が線路で電車と激突したなどというような誤った情報も錯そうして混乱していましたが、お昼を過ぎ、徐々に事故の深刻な状況が明らかになっていきました。この事故で本学では三人の学生が尊い命を奪われ、多くの学生が重軽傷を負いました。若くして志半ばで突然命を絶たれた方々の無念さは想像するに余りあります。

この悲しい出来事を契機に、本学では直近の一年間に亡くなられた現役の学生と教職員のために、また、同志社大学のこれまでの長い歴史において志半ばにして在学中に亡くなられたすべての学生、在職中に亡くなられたすべての教職員のために、共に祈りを捧げる「逝去者追悼礼拝」を行ってきました。不慮の事故、ご病気、その他さまざまな原因でご逝去されたすべての学生や教職員の方々に心より哀悼の意を表します。

さて、本日の奨励のタイトルを「Present——『今、ここ』にあるということ」とさせていただきました。若くしてこの世を去っていかれた多くの方々を思うとき、私たちは一日一日を大切に生きていかなくてはならないと強く感じます。ただ一方で、私がこれまで多くの学生と接してきたなかで、その逆の悩み、つまり、生きるのが辛い、生きる目的や意味がわからないといった声を何度も耳にしてきました。「人生八十年なんて長すぎる」とつぶやいた学生もい

ました。経済的困難、心身の病、家族や友人との不和など、様々な問題に直面している学生たちがいます。また、周囲から見れば恵まれた環境にあっても、将来に対する不安や劣等感など、深い悩みを抱える学生たちも数多くいます。「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」——アンパンマンのマーチにもある、この問いかけに対する答えを見出すのは、時にとても難しいことです。

私は皆さんの約三倍もの時間を生きてきました。この年齢になると、いつの間にか若い頃に抱いていた、自らの存在の意味に対する疑問などを、そこまで切実な問題として考えなくなっていることに気付かされます。そのような中で学生たちの声を聞くと、一瞬、過去の自分に出会ったような気持ちになることがあります。「青春」というと人生で一番良い時期、夢や希望にあふれた時期と考えられていますが、若いからこそ、不安や苦しみもまた痛切に感じられるのでしょう。「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」という問いかけに対して、私に答えがあるわけではありませんが、今日の奨励では、今一度私なりに生と死について考えてみたいと思います。

シェイクスピアの有名な悲劇、『ハムレット』に“To be, or not to be”という有名なセリフがあります。「生か、死か」、「世に在る、世に在らぬ」、「このままでいいのか、いけないのか」など、このセリフはこれまで様々な日本語に翻訳されてきました。ハムレットはデンマークの王子で、父親の亡霊から、叔父が父親を毒殺し、ハムレットの母親を妻として迎えて国王となったことを聞かされて、悩み苦しみます。その苦しみのなかで、ハムレットは「死」について考えを巡らせるのです。“To die—to sleep, / No more; and by a sleep to say we end / The heart-ache and the thousand natural shocks”——「死は眠りにすぎぬ——それだけのことではないか。眠りに落ちれば、その瞬間、一切が消えてなくなる。胸を痛める憂いも、肉体につきまとう数々の苦しみも」（福田恆存訳、新潮文庫 84 頁）。

しかし、ハムレットは一方で死という未知の世界への恐れを捨てきることできません。

”Who would fardels bear, / To grunt and sweat under a weary life, / But that the dread of something after death, / The undiscover'd country, from whose bourn / No traveller returns, puzzles the will.” ——「それでも、この辛い人生の坂道を、不平たらたら、汗水たらしてのぼって行くのも、なんのことはない、ただ死後の一抔の不安が残ればこそ。旅だちしものの、一人としてもどってきたためしのない未知の世界、心の鈍るのも当然」（同上 85 頁）。

ハムレットのように悩むかどうかは別として、私たちが人生において様々な困難に直面し、生きる意味を考え、その答えが見つからず悩みつつ、それでも生きていくのは、このセリフにあるように、「死」という未知の世界への恐れがあるからなのでしょう。けれども、ハムレットはなぜ、“To live, or to die”ではなく、“To be, or not to be”と言ったのでしょうか。

私たちはこの世に生を受け、名前を与えられ、一人の人間としての人生を歩み始めます。

ただ、私たちはこの世に生を受けたその瞬間を覚えているわけではありません。私たちは皆、気が付いたときにはこの世に存在していたのであって、自らの意思で「生まれた」わけではありません。人生の終わりを迎える時も、その最後の瞬間まで「ある」のであって、それ以降のことを自らが語ることも意識することもできません。つまり人は誰も、「生きる」、「死ぬ」という動詞以前に、「ある」(to be)の状態に置かれているのです。

英語で「ある、存在する」という状態を表すのは present という形容詞です。皆さんがご存知のようにこの present には、「ある、存在する」という意味以外にも多くの意味があります。「今、現在」という意味もあり、動詞としては「呈示する、示す、贈る」という意味も持ちます。さらには、名詞として「贈り物」という意味もあります。言語的直観が優れた人であれば、これら様々な意味はすべて、同じ概念から派生していることに気付くでしょう。それはすなわち、「今、ここ」という概念です。「今、ここ」にある状態にすることが「呈示する、示す、贈る」という動詞となり、それが「贈り物」という名詞の意味も持つようになるのです。

自分が「今、ここ」にあるということ——それは地球の始まりから現在に至るまでの気の遠くなるような偶然の重なりの結果であって、「神」といった超越的な存在を信じるか否かに関わらず、それだけで奇跡のようなことです。人生の意味や目的、つまり、「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」を問うのは大事なことです、たとえその答えが見いだせなくとも、まずは自分が「今、ここ」にあるという、重い事実を大切にしていきたいと思います。それは紛れもなく、祖先から続く無数の人々からの「プレゼント」——贈り物でもあるからです。

最後に、「一人として戻ってきたことのない未知の世界」へと旅立ち、「今、ここ」にあることのできなくなった方々に改めて思いを馳せ、心からの祈りを捧げて、本日の奨励とさせていただきます。